

【社名】 現在「尾津神社」といふ。但し、當社に比定される神社が多度町内に三ヶ所ある。

一つは、北小山に、一つは、戸津にあつて、それぞれ尾津神社と稱してゐる。もう一つは御衣野にあつて、昔は「八劍社」(『古事記傳』『特選神名牒』)と稱してゐたが、いまは「草薙神社」といふのがそれである。

『特選神名牒』では、北小山にある尾津神社をかつて里人訛りて「ごうつの宮」と稱したと述べてゐる。

【由緒】 古事記景行天皇の條に「(倭建命) 到坐尾津前一松之許。先御食之時。所忘其地御刀。不<sub>レ</sub>失猶有。爾御歌曰。袁波理邇。多<sub>レ</sub>邇邇半迦弊流。袁都能佐岐那流。比登都麻都。阿勢袁。比登都麻都。比登邇阿理勢婆。多知波氣麻斯袁。岐奴岐勢麻斯袁。比登都麻都。阿勢袁」とあり、又、倭建命が山代の玖々麻毛理比賣に娶まして生みませる御子足鏡別王は「小津石代之別之祖也」とある。日本書紀景行天皇四十年にほぼ古事記と同文の記載がある。即ち、「昔日本武尊、向<sub>レ</sub>東之歳、停<sub>三</sub>尾津濱<sub>一</sub>而進食。是時、解<sub>三</sub>二劍<sub>一</sub>置<sub>三</sub>於松下<sub>一</sub>。遂忘而去。今<sub>三</sub>至於此<sub>一</sub>、是劍猶存。故歌曰、烏波利珥、多<sub>レ</sub>陀珥霧伽弊流、比苔菟麻菟阿波例、比等菟麻菟、比苔珥阿利勢麼、岐農岐勢摩之塙、多知波開摩之塙」これらの記事によると、日本武尊が御東征の歸途、

〔C〕 三重縣桑名郡多度町御衣野(桑名郡多度村大字御衣野)

〔A〕 〔B〕は兩社共に「尾津神社」と稱し、近鐵養老線「多度」驛下車、驛のすぐ東側に〔A〕の尾津神社があり、更に東へ二〇〇メートル、多度川に沿つた集落戸津に〔B〕の尾津神社がある。〔C〕社は「草薙神社」と稱し、式内社小山神社から肱江川を狭んで南側の御衣野集落に在る。此處は近鐵養老線「下野代」驛下車、西へ約二キロメートル。三社ともに日本武尊を祭神とするが、この草薙神社の境内入口に「日本武尊尾津前御遺跡」と刻した石柱が建ち、昭和十六年に三重縣指定史跡になつてゐる。

【論社考證】 まづ「C」社の草薙神社は、古く八劍社とも稱し、日本書紀記載の傳承にもついでこの地に神社を建てたといひ、現に本殿横に傳承の松の「枯株」が大切に保存されてゐる。従つて『古事記傳』にもこの八劍社を尾津神社に比定してゐるが、この御衣野の地は東流する肱江川の南側にあつて、往古は野代郷に屬してゐて尾津郷に隸屬してゐなかつたから、この説には賛成し難い。

〔B〕社については『特選神名牒』に「神名帳考證や式社案内記、古本草紙等によれば、本社をもつて尾津神社に比定してゐるが、もともとこの社は八幡社であつて五十年

養老山系の東麓を通り、尾津濱まで戻つてこられた。ところが往路に尾津濱の松の下に劍を置き忘れたのが、歸路まだ劍が残つてゐた。そこで尊は「尾張に直に向へる。一つ松あはれ。一つ松。人にありせば。衣著せましを。太刀佩けましを」と詠まれたといふのである。尾津についての日本武尊の傳承である。

この附近には「尾津濱」とか「尾津崎」などの小字名が残つてをり、往古尾張へ渡る據點として早くから交通の要路にあつたと思はれ、しかも古事記にいふ倭建命の御子足鏡別王が小津石代之別の祖であるといふのであるから、小津即ち尾津別の根據地であつたと考へられ、この氏族によつて日本武尊とその御子である足鏡別王(始祖)を祀つたのが當社ではあるまいか。又姓氏錄の未定雜姓大和國の條に「尾津直 漢高祖五世孫大水命之後也」とあり、その歸化系氏族の一部も此處に居住してゐたのかも知れない。

【所在】 尾津神社の傳承地については次の三社がある。

〔A〕 三重縣桑名郡多度町北小山四九一番地(和名抄に「桑名郡尾津」とある。桑名郡多度村大字尾津)

〔B〕 三重縣桑名郡多度町戸津(桑名郡多度村大字戸津)

前に小社を造り尾津神社として合祀したものであり、北勢古志には尾津神社でないことを論じてゐる」と述べ、更に地名について「戸津の名は尾津を訛りたること明なり、里人今もトツとは云はずトウツと呼は、尾津を遠津とかきたるをとほつとよみたるか、後に戸津と書しなりとぞ、戸津村の地に尾津の地さきの漸開けゆきて一村となりし新村なれば、式社あるべき地ならず云々」といふ説を擧げてこれを疑問視してゐると同時に、一方、〔A〕社についても、里人のいふ小山村尾津郷の内にある神倭建命、足鏡別命を祀る尾津宮をもつて、これを本來の社と認めながら「そも尾津は十一ヶ村に冠すべし、されど戸津も小山もみなとも決めがたし」と、どちらにも決しがたい態度を示してゐる。

以上三社について、諸説があるが、地形上から考へ、往古多度川が海にそそぐ海濱地帯が今の多度町小山地區であり、景行紀に見える「尾津濱」や「尾津前」の地名は、この小山の尾津の内に當ると考へられる。又、「小山」の地名は、小山連の氏族名から小山と稱したもので、古い地名と思はれるから、この地に在る〔A〕社の尾津神社をもつて本來の社と比定すべきであらう。

【祭神】 神名帳では尾津神社の祭神は二座となつてをり、神社明細帳によれば「倭建命」<sup>ヤマトノタケノミコ</sup>「足鏡別命」<sup>アシカガミワケノミコ</sup>と他に五柱（不詳）が合祀されてゐるといふ。『神社叢録』には「舊事紀<sup>天皇</sup>成務天皇四十八年三月條に、「日本武尊兒稚武彥王命、尾津君等祖」とある記載によつて「祭神尾津君祖歟」と述べてゐる。又、「考證に、日本武尊、稚武彥命と云るは然るべし」とも述べてゐる。古事記では弟橘比賣命の生まれた御子を若建王とする。日本書紀では稚武彥王と記してゐるが、恐らく同一人に關する異傳であらう。なほ、書紀ではこの稚武彥王とは別に、兩道入姫皇女の生まれた稚武王をあげるが、古事記には見えない。『古事記傳』は、書紀が稚武彥王と書くのは、孝靈天皇皇子稚武彥命と混同したのであらうとしてゐる。一方、古事記では山代の玖玖麻毛理比賣の生まれた御子として足鏡別王があり、小津石代之別の祖であるとする。書紀にはこの御名は見えないが、仲哀天皇元年閏十一月の條に、仲哀天皇の異母弟（日本武尊の御子）として見える「蘆髮蒲見別王」<sup>アシガミノカマミワケノミコ</sup>と同一人であらうと考へられるので、尾津神社は日本武尊の傳承にもとづいて、日本武尊とその御子足鏡別王（尾津直の祖）の二柱を祀つたものと思はれる。これが稚武彥命としたのは混同による結果である。

【祭祀】 例祭は十月十一日、春祭は二月二十五日、野上祭は七月六日、秋祭は十一月二十三日である。氏子數は一七〇軒で、管理者總代として伊藤淳次郎氏があり、現宮司としては多度神社の權宮司平野直憲氏が兼務してゐる。

【社殿】 本殿 神明造、間口、奥行共〇・四八間。覆殿は間口一間、奥行一間、一坪。拜殿は間口三間一尺、奥行二間一尺、六坪。祭器具庫 間口一間、奥行一間半、一坪半。幡棹入舎 巾一間、長さ八間、八坪で社務所を有しない。

【境内地】 八五一坪八三で、境内は松、くぬぎ等の古木が約十數本亭々とそびえ、いかにも古社らしいたたずまひを呈してゐる。

（吉井良隆）